第2部　各分野での震災後の取り組み
第8章　ボランティア活動とその課題

久保田滋子

はじめに

大きな災害が起きると、今では多くのボランティアが駆けつけるという光景が当たり前になったが、一般の人々が延べ100万人以上も災害現場に駆けつけて被災者を助けるようになったのは、平成7（1995）年に起きた阪神・淡路大震災が最初であり、東日本大震災は、大規模災害としては2度目の経験となった。被災地では、遠方からやってくるボランティアの受け入れ経験がないことに加え、津波による災害が激甚であったため、ほとんどの市町村では行政もすぐには機能せず、ボランティアへの対応もまちまちだった。宮古市では社会福祉協議会が津波の被害を受けなかったために、被災後すぐにボランティアセンターを立ち上げ、早くから初動体制を整えることができた。しかし市民の日常生活もままならない被害の大きな現場に、いつから誰をどのように受け入れるのかという問題は、走りながら考えるという状況であった。この章では、ボランティアを受け入れた社会福祉協議会がどのようにこの状況に取り組み、ボランティアに入った側がどのような経験をしたのか、長期支援に取り組んだカリタスを例に取り、主にインタビューの記録を通して明らかにしていく。

1　社会福祉協議会の取り組み

(1)　ボランティアセンターの立ち上げ

宮古市の防災計画では、市からの要請を受けて災害ボランティアセンターを立ち上げることになっているが、宮古市役所が被災により2日間連絡が取れなかったため、社会福祉協議会では事務局長と次長、地域福祉課の職員が話し合い、市からの要請を待つことなく3月13日に独自に災害ボランティアセンターを開設し、市へは後日報告を行った。その後、3月21日からは北海道社協、3月24日からは静岡県社協の支援を受け、また㈱プロミスや㈱GSK（グラクソ・スミス・クライン）、陸中宮古青年会議所などの協力もあって徐々に体制を整え、3月中には本格的に活動を開始した。市内で立ち上げられたボランティア組織である宮古災害復興支援活動チームM・A・D（Miyako Action Debelopment）も協働した。組織は、会計と物資受け入れを担当する総務班、ボランティア活動班、地域ニーズ調査班、マッチング班、仮設住宅・避難所支援班、イベント企画班、生活資金相談班に分かれ、ボランティア活動班はさらに、受付係、炊き出し等イベント班、オリエンテーション係、資材準備運搬・送り出し係、宿泊所運営班に分かれて活動した。センターを立ち上げたその日に、市内からボランティア希望第1号の申し出があり、その後市内在住の大学生、高校生を中心に日を追って登録者が増え、3月末日で延べ409人が登録し、稼働人数は延べ731人に達した（「災害ボランティア登録・稼働人数等」：宮古市社会福祉協議会作成資料）。団体の第一号は、3月15日に登録した新潟県の企業で、避難所への風呂提供の申し出があった（宮古市社会福祉協議会作成資料）。これは自衛隊の風呂設置より早かった。現場への人員の派遣は3月16日からで、この日は食料配達に1人、訪問入浴に1人が出向いた。新潟中越地震のときに、宮古市社協へ訪問入浴車と職員派遣の要請があり、その経験を生かして3月18日からは入浴車で避難所を回り、高齢者への足湯や新生児の沐浴を行った。当初はまだボランティアも少なかったので、社協職員も課を超えて協力し合い、できることは何でも行おうという意気込みで臨んだ。子育て支援係は子供のいる世帯へ声をかけて回り、地域福祉課は避難所と学校を回り調整を図った。

震災後すぐに県外から市役所へ炊き出しをしたい等の申し出もあって、個人的に避難所に行ったケースもあったようだ。しかし、ボランティアは被災者のニーズに合わせて行うべきで、個人が勝手に動くと収集がつかなくなる。ボランティアの受け入れで最も重要なことは、被災者が何を求めているのかというニーズを把握して、ボランティア希望者とのマッチングを図ることである。担当者が避難所や仮設住宅へ電

話をかけたり訪ねたりして、ボランティア登録者の希望を伝え、困っていることや必要なものの情報を集めて回ったが、社協職員によれば、最初のころは「本当にお願いしてもいいのか」という反応だったという。ボランティアという支援のあり方に不慣れであったことに加え、外部の人が入ってくることへの不安感や違和感もあったと思われる。個人、特に市外から来る人は被災地の土地勘もなく、被災状況も把握できないため、勝手に歩くことはその人にとっても危険がある上に、被災者にも不安感を抱かせることもある。そこでボランティアセンターでは、3月中は混乱を避けるため、県外の団体や個人の申し出を受けず、県内の団体と市内の学生のみを受け入れた。活動の中心になったのは連合岩手で、連合ではその後も引き続き9月10日まで全国から1週間ずつ交代でやってきて、がれきの撤去や泥出しを行った。4月中旬から県外の団体も登録をするようになり、関西の大学や東京の企業、役所の有志によるグループが物資仕分けなどに参加するようになった（「炊き出しイベント等ボランティア台帳」：宮古市社会福祉協議会作成資料）。4月16日からは県外の団体も正式に受け入れるようになり、カリタス札幌など独立性の高いＮＰＯが長期の活動を開始した。カリタスは多くのボランティアが引き上げたあとも宮古に残り、仮設住宅から公営住宅への移転が完了するまで傾聴活動を続けた。ＹＭＣＡは独自にボランティアセンターを立ち上げ、社協と協力しながら仮設住宅引き上げまで長期にわたって活動した。ゴールデンウィークに入る4月末には県外個人のボランティア登録も開始したが、条件としてテントや車中泊を禁止した。宿泊に関しては6月から小山田の地区センターを借りて、1日20人くらいの受け入れができるようになった。ここは敷地内禁煙にしたがタバコを吸う人も多く道路で吸って苦情がきたこともあった。仕事のあとの一服のための場所までは考えられていなかった。

ボランティアに割り振られた仕事は、3月と4月には物資仕分けと配給、災害ボランティアセンター運営の手伝い、避難所運営の手伝い、被災家屋の泥出し、がれき撤去が中心だった。物資は最初水道事業所に集められたが、手狭であったため市が新里のトレーニングセンターに場所を移した。ボランティアは、送られてくる支援物資をここで開封して用途別に仕分けして各避難所に配送した。役に立った支援物資は子供用・介護用おむつ、飲料水、ミルクで、衣類や下着は使用済みのものが多くて大変困った。ボランティアセンターの運営では、スコップなどの資材調達やボランティア希望者の受付業務、オリエンテーションなどを行った。スコップは品薄だったので買わなくてはならず、秋田からも取り寄せた。個人ボランティアの中には理容や美容などの特技を生かしたり、音楽の演奏などを希望する人もいるが、10人いれば10通りのマッチングをしなければならず大変だった。理容、美容、マッサージは一番望まれるものであったが、最初の数か月は被災者がボランティアに頼むことを遠慮したため、なかなかニーズとしてセンターに届かなかった。炊き出しのニーズはあったが、なるべく規模の大きいところに行きたいというボランティアが多かったので、小さなところへ行くようにセンターでマッチングを行った。また訪問入浴車の巡回も行った。

ゴールデンウィーク以降は、被災家屋や個人商店での家財道具出し、側溝の泥出しに加え、仮設住宅への引っ越し作業やイベントが数を増した。市内では5月くらいからさまざまな復興イベントが催されるようになり、また社協もボランティア団体と協働で「子供まつり」などを開いたので、その補助にも人手が必要だった。また、炊き出しやマッサージなどのボランティア側の希望をセンターがイベント化することもあった。ボランティアが提供するイベントは、被災直後の3月18日から盛岡ＹＭＣＡや盛岡青年会議所、整骨院、鍼灸あんま指圧師協会、理容師組合、保育園、飲食店などの団体が来て行ったが、ゴールデンウィーク中は全国から20を超える団体が入って、炊き出しをはじめさまざまな催しが行われた。そのほかには、写真の洗浄や整理も多くの人が取り組んだ。写真は、最初は市が保管していた。震災の年のお盆の時期に返却しようという計画だったが、まだ泥のままだったので、ボランティアが洗浄することになった。しかし個人情報という問

題にぶつかり、お盆には間に合わず、洗浄の話はボランティアセンターに回されて、盛岡社協が引き受けることになった。きれいになった写真は２０１２年春から仮設ごとに返却され、２０１２年秋ごろからは、イベントとして返却会を行った。２０１２年から２０１３年にかけて、写真返却センターが設置されたが、洗浄した全写真のおよそ半分は引き取り手が現れなかった。

７月、８月になると、がれき撤去や泥出しなどの仕事が少なくなり、同時に避難所から仮設住宅への引っ越しが本格化したため、それに合わせてボランティアの仕事内容も変わってきた。７月６日には盛岡市社会福祉協議会が川井にある高校の廃校舎を利用して、宮古、山田、大槌などを長期的に支援するために、宿泊無料送迎バスつきのボランティア基地「かわいキャンプ」を立ち上げた。ここでは支援先の災害ボランティアセンターと連絡をとり、マッチングを行ったうえでボランティアを派遣したので、人が増えても混乱はなかったが、仮設住宅での住民交流やサロン活動に携わる仕事が増えたために、肉体労働よりも向き不向きがあった点が難しかったようだ。

⑵　宮古市生活復興支援センター

夏休みが終わり９月に入ると県外ボランティアの数は減少し、また被災者も仮設住宅で新しい生活が始まったため、支援のあり方も災害支援から地域支援へ変えていく必要があった。社会福祉協議会では、仮設住宅での生活上の問題に対処していくため、９月13日に宮古市生活復興支援センターを立ち上げ、生活支援相談員や生活支援員を置いて、新たな問題やニーズに対処していった。

被災直後に立ち上げた災害ボランティアセンターの仕事は、この部署に引き継がれた。センターの運営には、市内外の有志で結成した宮古災害復興支援活動チームＭ．Ａ．Ｄも携わった。宮古市の場合、なるべく元のコミュニティを維持したまま仮設住宅への入居ができたが、それでも同じエリアにどのような人が住んでいるのか、新しく隣人になった人との人間関係など、悩みや不安が大きかった。復興支援センターは独自に交流会を開き、住民間のコミュニケーションを促したが、ボランティアもさまざまなイベントを企画して住民の交流を助けた。料理教室、体操教室、将棋、囲碁、手芸教室などを開催する一方で、お茶と菓子を用意して被災者とともに時間を過ごす「サロン」活動も行った。イベントの種類によっては、ボランティアが来ないときでもサークル活動のように長続きするものもあったが、反対にあまり関心が持たれないものもあった。センターでは、仮設の住民のニーズに合わない、ボランティアのためのボランティアが行われないよう注意を払った。体操など健康管理につながるものは人気があった。カリタス札幌は趣味と実益を兼ねた「さおり織」の機械を提供して、講師による織り方の指導も行った。「サロン」活動は特に何かのイベントを行うわけではなく、被災者の言葉に耳を傾けることを目的とした。市内の傾聴ボランティアグループ「支え愛」が仮設住宅の集会所で、「えがお」は主に個人宅で活動した。「支え愛」ではメンバーが傾聴の講習を受けており、震災前から市内の高齢者施設や病院を回った経験を生かして活動を立ち上げた。カリタス札幌でも、出発する前には傾聴の講習会があった。人の話に耳を傾けるのは簡単なようで難しい。はじめから傾聴を主な目的としている場合と違い、かわいキャンプからあまり経験がないまま派遣されてきた人や、20歳に満たない市内の学生ボランティアには荷が重かったケースもある。それでも、高齢者の多い仮設住宅では、若い人が訪ねてくると喜ばれることが多かった。

⑶　ボランティア受け入れの問題点

社会福祉協議会は、ボランティア受け入れに際して以下のような問題点があったと指摘している。

- 被災後早い時期にやってきた個人ボランティアが避難所や公民館に勝手に寝泊まりしたり、外でたき火をすることがあった。また、壊れそうな家に入るなど事故につながる危険もあった。土地の事情に疎い市外の個人ボランティアの登録には慎重を期したが、社会福祉協議会を通さず、勝手に入ってくる人々には手の打ちようがなかっ

た。

- 車中泊のボランティアに対し苦情の電話が多く来たが、それに対応する職員が疲弊した。
- 支援物資がとめどもなくやってきて仕分けに大変な時間がかかった。手作り品や千羽鶴はありがたいが迷惑した。
- 被災者支援が被災者の自立を妨げるという問題がある。無料で物品を配ったり、あまりに手厚い支援を行うとそれに慣れてしまって自立できなくなる。またボランティアと被災者が共依存関係になり、距離を取ることが難しいケースも出てきた。
- 支援の不平等があった。自宅の被害が少なく仮設住宅に入っていない人に支援が回りにくかった。
- 経験豊富なボランティアは、他所での事例で動こうとするが、地域性や災害の種類も違うのでうまくいかないこともあった。
- 被災者がボランティアという支援のあり方に不慣れで、どのように対応してよいかわからないケースもあった。見ず知らずの他人に仕事を頼んで良いのか遠慮したり、空き巣や犯罪などに対する不安もあった。

以上のような問題に加え、社会福祉協議会の受け入れ態勢にもいくつかの問題が指摘できる。ボランティアと一口にいっても、個人から専門性の高い自己完結型のＮＧＯやＮＰＯまでさまざまであるが、宮古市の場合は市内あるいは県内という内輪と外部を線引きして、専門性の高いＮＰＯの受け入れを躊躇した。いち早く自己完結型のボランティア組織を受け入れたところも多い中で、資金的にも支援ノウハウという点でも、これらの組織とつながりを持たなかったことは惜しい面もあったのではないか。言い換えれば、支援を受ける力「受援力」が足りなかった。今まで市内だけで事足りていたところへ、突然市外・県外・国外の諸団体と関係を持たなくてはならない状況になったことは、確かに過酷であったと言える。災害時に、外部といかに関係を取り結ぶか、何を受け入れ何を断るのか、個人ボランティアをどのようにコントロールするのか、市民ＮＰＯの力をどのように生かすのか、今回の経験を通して「受援力」を高めることは、今後の大きな課題であると思われる。

⑷　ボランティアに参加して

田中宣廣さん　岩手県立宮古短期大学教授　学生赤十字奉仕団顧問

被災後のボランティア活動

宮古短大の学生赤十字奉仕団は２００８年に小さな同好会としてスタートした。２００９年に学内サークルとして認可を受け、震災後の２０１２年に赤十字奉仕団として日本赤十字に正式に登録した。最初は高校のときにＪＲＣ(青年赤十字奉仕団)をやっていた学生が集まり、２学年で10人くらいの規模だったが、２０１１年の震災を機に55人に増えて、学生の奉仕団では東北最大の規模になった。秋田にある看護学生赤十字奉仕団は１００人以上の参加者がいるがこれは例外で、宮古短大は総人数も在学生に対する参加の割合も全国レベルで大きい方だと言える。

震災が起きたときは学年末で部員は１年生４～５人だけだった。宮古出身の３代目サークル長と一関出身の副サークル長が顧問と話し合い、さっそく４月から新里トレーニングセンターで物資の仕分けボランティアを開始した。新１年生の入寮と入学式は５月に行われ、それと同時に新しい部員の募集を開始。多くの協力者を得るために例年より強力に募集活動を行った。その結果、６月には延べ56人もの新メンバーが泥出しと個人宅の片づけボランティアに参加した。はじめは泥の清掃などが中心だったが、被災者が避難所から仮設住宅に移ったあとは、住民の親睦をはかるため、集会所で鍋の会などを行った。

２年目からは、できるだけ震災前の状況に戻そうと思い、地元のボランティア団体という特性を生かし、子供の学習教室を行った。子供を対象にした活動は、他所から来たボランティアになかなかまかせられない。日常的に同じ空間で生活している人でないと子供の相手はできないし、地元の学生という信頼感も大きい。外部からやってくるＮ

ＰＯは信頼できないものも多く、行政も規制していない。怪しいＮＰＯが岩手県庁の審査をすり抜けて県立大学に来たこともあり、ＮＰＯだからと一概に信用してよいわけではない。資金がオープンになっていなかったり、実名が出ていないものは信用できない。その点、赤十字奉仕団は日本赤十字社の組織であり、しかもメンバー全員が短大の学生で宮古に住んでいる。子供の学習支援には最適なので、社協が御膳立てをして仮設住宅にいる子供たちを公民館に集めた。２年目はこれが活動の中心となった。社協からは感謝状が贈られたが、それも赤十字と地元学生という信頼関係あってのことだ。赤十字奉仕団として誇れる業績だと思う。

そのほかにはいくつかの復興関連イベントにも参加した。被災後わずか３か月で開催された「あきんど復興市」や震災前から行われている「みやこわくわくまつり」の運営補助にも携わった。補助だけでは面白くないので、実行委員会の一部としてカレーの店を出したところ60食が30分で売り切れる盛況だった。カレーは、山田町の「アマチュア無線ネット赤十字奉仕団」が行った小学校での炊き出し会に参加したことがきっかけになって、宮古短大のチームのレパートリーに加わった。初回は何度も試行錯誤をして、保健所にも届け万全を期した。その後も復興市やわくわくまつり、大学の学園祭などに出店しているが、これは万が一のときの食事作りの訓練も兼ねている。ただ出店するのではなく、手順や材料の記録をしっかりとって、人が変わってもすぐにできるようにしている。

今年度の２本の柱

震災後の緊急の支援が一段落したら、復興への手助けに加え、花植え、赤い羽根、献血などのもとの活動も行っていきたい。今年度の活動目標には２つの柱がある。１つ目は、被災地の現状発信を行うことである。外部の人々とやり取りをしていて一番気になることは、被災地に対する理解度の低さで、もはや話が通じないレベルだ。マスコミも発信しているが、理解力に欠けている。本当に現地を見ているのだろうか。被災者の心情に関しても、理解度が低いというよりは、理解しようという努力が感じられない。

津波から１年半が経って、マスコミも相当多くの被災地報道をしたので、現地のことはある程度伝わっていると思われるが、肝心なことはほとんど伝わっていない。仮設住宅の人の住民票は元の住所から仮設住宅に移していない人もいる。大槌町では特に多い。それは元の家に戻りたいという被災者の強い思いの反映だ。それが明らかになったのは衆議院選挙のときで、投票券が５００以上もあて先不明で戻ってきた。田老でも住民票を移していない人がいると聞く。内陸から調査にやってくる人々は、このようなことは行政が把握しているだろうと思って質問もしないが、行政ですら把握していない。震災から１年目までは、そのような人はもっとたくさんいて、地元では知られているのに、盛岡では誰も知らないという状況だった。そのような被災地の現状を、学生の立場からどんどん発信していきたい。これは誰もが思っていることだと思う。

２つ目は、被災者の精神的なバックアップである。特に、家も家族も失っていない人へのバックアップを重視したい。財産の被害を受けていない人は行政上被災者ではないため、今まで精神的なバックアップはされてこなかった。申し合わせたわけではないが、社協もこの問題に注目している。彼らは何かを失ったわけではないが、自分の町が被災し、友人や知り合いを亡くしている人も多い。そのような状況にいくら心を痛めていても、「あなたのところは残ったからいいじゃない」と言われ感情を抑圧している。家を失った人は、大っぴらに泣いたり悲しんだりできるが、何も失っていない人が同じように泣くわけにはいかないという雰囲気がある。短大の学生でも、一度感情を素直に出させると、この子も笑うのかというほど変わってくる。今、80代の人は昭和の三陸津波を経験しているが、その人たちが「あの気まずさ」という話をすることがある。それは、家が残った人たちと失った人たちの間の「気まずさ」、津波から逃れた人と家族を亡くした人との間の「気まずさ」である。家が残れば幸いだったというのは間違いで、その

地区全体が同じように被災したと考えなければならない。このことについては、赤十字への寄付者向けの報告書に、「知られていない被災者」というコラムを書いた。

防災に必要なこと

田老の堤防にはボコボコした突起があって、数えてみると736個ある。これは単なるデザインかと思っていたが、昭和三陸大津波の死者数だと書いた文献が出てきた。壊れない構造物に刻みつけたのだろうが、文献があっても時が経てば忘れられていく。これは、その形の意味を忘れたのではなく、防災の意識がなくなったということだ。50代の人に話を聞くと、小学生のときには、すぐに逃げられるように枕元に洋服を置き、靴は外向きに置いて寝ていたが、中学生になるとそういうことをしなくなったという。また、田老の防潮用堤防と津波用堤防の間には家を建ててはいけないことになっていたが、いつの頃からか家が建ちはじめ、最初の頃は問題になっていたようだが、それもなし崩し的に容認されるようになってきた。田老だけで公開されている津波の映像を見たが、本当に一瞬ですべて終わっている。たろう観光ホテルの周囲はがれきすらなかった。

氷倉庫には、明治と昭和の大津波、東日本大震災の津波が到達した高さに、ペンキで印をつけている。ペンキではしばらくすると剥げて書き直さないといけないが、実はそれが重要なことだ。書き直すたびに高さを実感して、防災への意識を再確認していく。石碑に刻んだり構造物を作ることは、確実に記録を残すが、忘れ去られるということでもある。しかし、伝承ということを考えると、ダメージの大きいものを目に見える形で後世に残していくことは必要だ。たろう観光ホテルや大槌の役場を残すには費用がかかる。一部だけ保存してもインパクトは薄い、原爆ドームのように見てわかる形で残すことが重要だ。それは歴史を伝えるだけではなく、次の災害への心の準備でもある。津波は人的な被害をなくせる唯一の大災害なので伝承は重要である。モノ、文字と二重三重の記録が必要だ。実際に津波を経験した人から話を聞く機会も設けなければならない。田老では東キヌさんが語り部として学生たちに被災体験を話してくれたが、非常に印象深く貴重な体験となった。また、被災地には津波の時間で止まったままの時計がいくつかある。場所によって被災した時間が異なり、止まった時計は被災の瞬間を教えてくれる。「学ぶ防災」の表紙も時間の止まった時計だが、時計は被災のシンボルでもある。被災地の時間は動き始めているのだろうか。山田町長が「われわれはまだ津波の中にいる」と語ったことは印象的だった。

津波があったとき、被災地にいてよかったと思う。いなければわからないことがたくさんあり、これからも刻々変わる状況を被災地の住人として発信していきたい。

今後の課題

今後は公営住宅に移った人たちの心のケアをしていきたい。宮古では仮設住宅入居時に、山田町と違って元のコミュニティを崩さないような配慮があった。公園がたくさんあり、それを使って、元の家から近いところに入居できた。そのため自治会を作ったが、あまり必要がない状況だった。しかし公営住宅では元のコミュニティがばらばらになる。都会のマンションと違い人の入れ替わりがほとんどなく、しかも隣同士との距離感がない。家賃が高いので、この辺では同じ金額で一軒家が借りられるため、若い世帯は公営住宅ではなく一軒家を探すか、家を新築するケースが多い。そのため公営住宅は高齢者が増える。この状況をフォローしていかないといけない。社協が地区ごとに担当者を決めて、それぞれの地区の町内会と話し合い、交流会などの企画を立てているが、赤十字奉仕団もそれに参加して、サンドイッチやかき氷、鍋の会などを企画している。参加費は食材費として300円いただいているが、これでは賄えないので、赤十字の持ち出しになっている。赤十字奉仕団は今後の被災者支援のパイロットケースになるだろう。震災以来、状況はどんどん変化している。その記録を取ることも重要なことだ。最初のころに写真を撮っていなかったことが悔やま

れる。

（２０１５年11月３日　宮古短大応接室にて取材）

鈴木里海さん　平成４（１９９２）年生

元県立宮古短期大学赤十字奉仕団委員長（２０１２年度）

２０１１年３月11日、鈴木里海さんは実家のある大船渡で被災した。実家の畳屋は津波で流され、４月に入学する予定の宮古短期大学の入学手続き書類一式も失った。大学にやっと連絡が取れたのは震災の日から３～４週間あとで、書類がないことを伝えると再発行の手続きをとってくれた。宮古に来たのは４月下旬である。

入学式はなく、授業は５月になってから始まった。同時にサークルの募集も始まった。震災直後ということもあって、「ＪＲＣ（青年赤十字奉仕団）ボランティアサークル」に人が集まっていた。高校でもＪＲＣという部活があり、高校生の間では、ＪＲＣといえばボランティアを意味していた。短大のＪＲＣもこのときはまだ正式な赤十字の組織ではなく、単なるボランティアサークルという意味でつけられていた名称だったのかもしれない。積極的な勧誘もあり、新入生の多くはＪＲＣに入ったが、上級生は５～６人しかいなかった。鈴木さんは入学前、大船渡の避難所で、支援物資の服をサイズごとにわけたり、トイレ掃除をしたり、３００人分の食事を作る給食センターを手伝って、ひたすら卵を割り玉ねぎの皮をむくというボランティアをしていたので、迷うことなくＪＲＣに入部した。

５月の段階で、新入生が20～30人くらい入部した。しかし、入るときには活動内容の説明がなかったので、ボランティアといっても何をやるのかわからなかった。その後、社協から仕事が割りふられ、夏の終わりころまでは、泥出しや独居老人の家の片づけなどを行った。秋になってからは、社協から、仮設の集会室で行うサロン（傾聴活動）に、短大生も入ってほしいという依頼があり参加するようになった。しかし、いきなり傾聴といわれても最初はただ座っているだけで、常駐している社協の人が、仮設の住人との間を取り持ってくれるという状態だった。

２０１２年の２月になって、みやっこベースというＮＰＯを主催している人を通して、仮設に住む中学生が勉強に集中できないので、学習支援をしてほしいという話がきた。特に受験を控えた子供が狭い仮設で困っているとのことだった。そこで最初は週一回土曜日に崎山公民館に集まってもらい、勉強をみてあげることになった。しかし、実際にはおしゃべりの相手をすることも多く、中学生のストレス発散につきあうような感じであった。それと並行して、小学生の面倒も見てほしいという依頼があり、日曜日は清寿荘と近内の仮設に、隔週交代で行くようになった。そのほかにも、商店街主催の復興イベントの手伝いなど、要請があればどこにでも出向いていた。子供が苦手な人は主にイベントの手伝いに回った。

２０１２年１月に次年度のＪＲＣ委員長に推薦され引き受けることになった。この年の６月、ＪＲＣは正式な「赤十字奉仕団」に登録された。いきなり「Donabe Net のリーダーをやってください」と言われて引き受けたが、これが委員長になってくれということだった。Donabe Net は震災前から岩手県立大学ではじまったボランティア活動で、地域交流を目的としている。宮古短大では先輩の代に、老人介護施設などで２か月に一度くらい行っていた。この年は実田仮設と河南仮設を交互に訪問する予定だったが、学習支援と小学生の相手が毎週あって時間がとれず、なかなか実行できなかった。学習支援と小学生の世話は絶対に休むわけにはいかなかった。サークルの人の多くは子供の相手が苦手ということで、交代してくれる人がいなかった。そのうえ、社協から依頼があっても、アルバイトや個人的な事情で誰も手を上げてくれない仕事が多く、それも委員長の責任上こなしていかなければならなかったので、だんだん勉強どころではなくなっていった。

一度、山田社協から洗浄した写真をスキャンしてパソコンに取り込む仕事を依頼されたことがあった。洗浄だけでは傷むので、早くパソコンに取り込む必要があるということだった。大学にスキャナーがあったので（顧問の先生が）引き受けたのだと思う。６～７箱の段ボール

にぎっしり詰まった写真は1千枚以上あった。それを6枚くらい並べてスキャンしていくのだが、果てしない単純作業で本当に苦痛だった。自分の代では終わらず、山田社協に謝りに行った。

単発のイベント「PIKAPIKA PROJECT」の手伝いなどもした。ペンライトで空中に文字を描き、それを連写して文字を浮き上がらせ動画に撮る企画で、その撮影のときには午前3時に浄土ヶ浜に行った。宮古の支援グループと大阪電機大学の人たちが中心になって行ったが、このような単発プロジェクトを企画して実行するのは楽しいだろうと思う。他所の大学生が短期間来て行うイベントは地元でも喜ばれるうえに、やっている人も楽しそうで「いいなあ」とうらやましかった。それに比べると、自分たちのボランティアは日常の一部になっていて地味な仕事だった。

赤十字奉仕団として独自の単発のイベントを企てたこともある。仮設住宅に住む人をガイド役にして、ハイキングや散歩をし、そのあと参加者全員で食事をするという案だった。しかし、その話し合いをしたくても人が集まらず、企画をたてることさえできなかった。赤十字奉仕団というサークルに限定せず、もっと広く声をかけて、その日だけの単発のイベントを行う方向で考えればよかった。

委員長の仕事は苦労の連続だった。ボランティアは社協から依頼を受けて動くのだが、社協は「いつ、何人必要」とだけ言ってきて、人員集めは委員長の仕事だった。「赤十字奉仕団」に登録している人は60～70人いたが、ほとんどは名前だけで、実際活動してくれる人は10人くらいしかいなかった。社協から言われて学内で募集しても誰も応じてくれないことも多く、副サークル長と2人で回していたというのが現実だった。岩手県立大学の場合は、赤十字奉仕団というサークルはなく、大学のボランティアセンターがニーズを把握して、ボランティアが必要になったらメルマガ形式で情報を流していたので、人集めに関して誰かが負担を背負うということはなかった。

宮古短大では、社協から赤十字奉仕団にメールでボランティアの要請があり、人集めはこちらの仕事だった。誰がそれをやるのか。結局、委員長である自分が責任を負い、応募してくれる人がいなければ一人一人に都合を聞き、それでもだめなら自分が出るしかなかった。社協は、学生は自由な時間がとれるという軽い気持ちだったのかもしれないが、実際に出てきてくれる人は数人で、本当に人集めに苦労した。登録者が多いのは、赤十字奉仕団として被災地で「活動」したということが就職に有利になるという気持ちがあったからかではないか。サークルの勧誘のとき、そのような話があった。

2年生の秋くらいから、このままでいいのだろうかという気持ちを持ち始めた。静岡県までリーダー研修に行かされたことがあるが、そこに集まった人たちの活動は、献血推進活動や老人ホームの訪問など赤十字本来の社会奉仕が中心で、震災後の被災者支援だけを少人数で行っているのは例外だと思った。たしかに仮設住宅に住む中学生の学習支援は必要だろう。しかし、これに縛られていると、自分たち独自の活動ができなくなる。人数が集まれば両方できるのだろうが、活動する人が少ないうえに、その人たちさえアルバイトなどで来られないこともある。たくさんの登録者がいながら、数人だけが社協に言われたことをこなすために、大学の授業をぎりぎりまで休んで対応しなければならないというのはおかしい。

受験を控えた中学生の学習支援はニーズがあり、崎山公民館には多くの子供達が来ていたので、何とか続けたいという気持ちもあった。学習支援や子供の相手を、赤十字奉仕団ではなくても、商業高校のJRCと交代でできないか社協に相談したが実現しなかった。社協に通うのがだんだん苦痛になってきた。津波で家を流されて生活基盤を失いながらも、大学に快く送り出してくれた親を思うと、しっかり勉強もできず申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

就職活動をしなければならない季節になってもあまり集中できなかった。学習支援は夕方5時からなので帰宅は夜になるが、毎日履歴書を眺めて寝てしまう生活だった。同学年100人のうち宮古に残ったのは5～6人だけだった。彼らは岩手銀行、信用金庫、商工会議所、商店に決まった。自分はどうしたいのか考えると、ボランティアに明

け暮れてあっという間の2年間を過ごし、考えてみれば宮古のことをあまり知らない。週4～5回社協に通い、自宅と短大と社協を自転車で回るだけの生活だったように思う。せっかく宮古に来たのに、宮古の美しいところを何も知らないで去るのかと思うと残念で、何年間か宮古で働きたいという気持ちになった。人と接する仕事をしたいと思い休暇村（休暇村陸中宮古）に応募した。

休暇村では、老人クラブや地域の集まりなど、だんだん地元の人の宴会の利用も増えて活気を取り戻しつつある。就職して宮古のことも知った今では、そろそろ大船渡に帰ろうという思いが募る。実家の畳屋は機械ごと流されて畳を作れなくなったので、今は内装の仕事をしている。祖母は家の仕事を手伝っていたが、それができなくなって体調も良くない。毎月8万円借りていた有利子奨学金の返済もある。宮古では大変なことも多かったが、色々な人と出会えて本当によかった。学習支援では、子供たちと親しくなっていく過程も楽しかった。あのとき高校受験だった子供が今は大学受験の年齢で、今もまだ公民館で勉強しているのだという。コンビニなどで出会うと声をかけてくれるのがうれしい。

（2015年11月3日　市立図書館会議室にて取材）

早川　輝（あきら）さん　昭和62（1987）年生
NPO法人　みやっこベース　理事・事務局長

2011年3月1日、ワーキングホリデーで1年間過ごしたオーストラリアから日本へ帰国し、震災の日は東京にいた。その後、実家のある福岡に帰りボランティア活動に入る機会をうかがっていた。受け入れ可能な場所を探したところ、宮古の災害ボランティアセンターが宿泊場所を用意しているという情報をインターネットで得て宮古行きを決めた。6月15日バスで宮古駅へ到着。第一印象は、意外と震災の影響を受けていないということだった。宿泊場所である小山田の地区センターまで歩いていったが、これが本当に被災地なのかと思ったほど平穏な風景だった。翌日、車で津波被害の大きかった現場に行くと、テレビや写真で見た光景が広がっていて、はじめて被害の大きさを目の当たりにした。最初は2週間くらい宮古にいて、沿岸の南の方に移動し、2か月くらいボランティアを行うつもりでいたが、2週間滞在するとさまざまな人間関係ができて、ここでずっと続けていきたいと思うようになった。小山田の地区センターには10月いっぱいくらいまでいたが、夏休みをはさんだのでたくさんの人が寝泊まりしていた。

ボランティアの仕事をはじめた最初のころは、午前中は築地の個人宅で、午後からは鍬ヶ崎の菱屋酒造で泥出しをしていた。20～30代の地元ボランティアが社会福祉協議会と連携してリーダー役になって、個人で登録したボランティアのチームを引っ張っていた。地元の商業高校と短期大学のJRC（青年赤十字奉仕団）も一緒に泥出しやがれき撤去を行っていた。2011年の7月に地元のボランティアグループに入れてもらって、そこで子供の遊び場づくりなどを行った。9月になって、社協が災害ボランティアセンターを生活復興支援センターに移行する際に、所属していたボランティアグループが社協と協働することになった。それを機にボランティアコーディネーターを引き受けるようになった。それから1年後の2012年9月、ボランティアグループが解散し、メンバーはそれぞれ独立した活動をするようになった。

新しい活動を開始するにあたり次の目標として、若者が宮古の復興支援へ参加できるように助ける仕事をしていこうと考えた。復興には若い力が必要である。三陸沿岸は震災前から人口の流出が続いており、復興のためにはこの流れを食い止め、一人でも多くの若者に残ってもらわなくてはならない。何か動きを起こすなら、今がチャンスであると思い、2013年2月、社会地域活動や町づくりにかかわる意欲のある高校生を支援するために「みやっこベース」を立ち上げ、2015年9月にNPO法人として認可された。宮古でボランティア活動をはじめた当初から若者支援には関心を持っていた。「一般社団法人子供のエンパワメント岩手」が公民館で行った中学生の学習支援活動の仕事をしたこともある。宮古商業高校の生徒とは被災の次の年か

ら仮設住宅で子供の遊び場づくりを行って、宮古の将来のために何ができるのか話し合ってきた。そのような経験から、高校生サミットを開催して、高校生同士の意見交換の機会を作った。そこで宮古の活性化をテーマにプレゼン大会を開き、良いアイディアがあれば実現できるように各方面に働きかけた。たとえば商店街のマップ作りや、現在の宮古を見てもらうために独自のコースを考案し、内陸の高校生と大学生を対象にツアーガイドを行った。ツアーには盛岡から25人ほどの参加者があり、田老の防潮堤を見て三陸鉄道で戻り、フラットピア宮古で郷土料理を作って若者同士で意見交換を行った。これは赤い羽根の助成が受けられたため、個人負担は1千円ほどで済んだ。なによりも、この企画を成功させたときの高校生の達成感は大きく、若者支援をさらに前進させるはずみになった。そのほかには、高校生が集まる場所の運営、広報誌「MIYAKKO NEWS」（みやっこニュース）の発行も行っている。

２０１５年のシルバーウィークには、宮古の高校を卒業した若者と現役高校生による「地元修学旅行」を行った。合計20人の参加があり、1泊2日の行程で10人ずつ「海コース」と「山コース」に分かれて、地元再発見の旅を体験した。「海コース」は浄土ヶ浜で観光船に乗り、新卒のガイドの体験談を聞いた。またボートに乗り釣りをしたり、ジオパークのガイドツアーを体験した。「山コース」は川井で林業に従事している人に現場を案内してもらい仕事の話を聞いた。両コースとも休暇村に泊まり、2日目は全員で歩いて鮭ヶ崎まで行き、サッパ船を持っている人の協力で、サッパ船クルーズを行った。第一回目は、信用金庫が復興支援の一環で、若者の地元定住促進や企業体験のために設けた「東日本大震災しんきんの絆プロジェクト」の助成を得た。普段良く知っている地元でも、あらためて「修学旅行」を通して見直してみると、さまざまな魅力が見えてくる。1人でも多くの若者が地元にとどまってくれるよう、この企画を続けていきたい。２０１５年になってやっと給料が出るようになった。現在はパートを1人置いて、ほかに無給のボランティア数人で運営している。また、最近は気仙沼と大槌で高校生支援活動をしている人たちとのつながりができた。本格的な支援はこれからだと思っている。

（２０１５年11月4日　みやっこベースにて取材）

金野　侑さん　昭和59（１９８４）年生

ＮＰＯ法人　みやこラボ　代表理事

震災の前までは「ピアノ弾き」だった。震災後10日くらいたって、3月20何日かに社協にはじめて行ったところ、「ボランティア募集」の貼り紙を見つけた。すぐに応募して、泥かき、もの運び、茶碗洗い、海水のしみ込んだ畳を運び出すなどの作業を行った。初期のころは、このような現場作業のほかに、支援物資の仕分け、苦情の受付など避難所運営の仕事が主だった。夏になると、現場の作業も一段落し、社協の事務を引き受けるようになった。きれいに磨いた被災家屋が最終的に取り壊しになったり、ボランティアの名のもとに商店の手伝いなどをさせられたり、無駄なことやボランティアの域を超えたことなど気になることもあったので、ボランティアの仕事内容を調べていた社協に協力し、新たに入る人のためにニーズ調査も平行して行った。

２０１１年の夏からはＭ．Ａ．Ｄ（Miyako Action Development）というボランティア団体を立ち上げ12月頃から事務局長をやることになった。震災後の混乱の中で組織を支えることは容易ではなく、運営上の苦労は大きかった。赤い羽根共同募金や仙台の地域創造基金「みやぎ」（現在は「さぶりな」）から助成金を得たり、また寄付をもらったりしたが、最初は誰がどのように動けばよいのかよくわからない状態だった。本来は行政がサポートしてくれるはずだが、この時点でまだ行政は十分に機能していなかった。協働がどのようなものかわからないまま、とりあえず社協と一緒に活動することになった。その後はさまざまな研修会に出てＮＰＯの組織運営を学び、２０１２年には日本ＮＰＯセンターで研修を受けるために盛岡や仙台に出向いた。そこには、震災でＮＰＯを立ち上げたが運営方法で困っている人たちが多く集まっていた。およそ1年がかりで、東北3県のＮＰＯ代表や局長

クラスの人たちと一緒に、組織基盤強化について研修を受けた。震災前の宮古では20くらいのＮＰＯ法人があったが、事実上動いているものは10くらいであった。震災後に「がんばろう田老」、「みやっこベース」、「みやこラボ」、「三陸情報局」、「Ｍジョイ」の５つが新しくできて、現在は全部で20近くある。ＮＰＯは県や市町村、民間の助成を受けていて、お金があるときは元気がよい。しかしこれから資金援助は激減すると思われる。いかに今の状態を続けていくか、お金をどのように得ていくかが大きな課題となる。資金が枯渇したらやめなければならないのだろうか。その場合、ＮＰＯが独自のノウハウを持つことが重要で、行政がそれを真似て受け継ぐくらいにしていかないといけない。

Ｍ・Ａ・Ｄは被災者が仮設住宅に移ってから、社協が開設した生活復興支援センターで協働してきたが、次第に方向性について意見が合わなくなり、それぞれの方向に別れることになった。Ｍ・Ａ・Ｄ設立時に集まった７人は自分たちでこの街を新たに作っていこうという意欲に燃えていた。志半ばで組織は解散になったが、その意思を継続するために、「みやこラボ」のほかにも新たなＮＰＯを立ち上げた人もいた。社会福祉士の資格を持つ人は社協に引き抜かれた。震災のあと、社協には臨時の職員がたくさん入った。しかし、一段落すると臨時の職員は切られていく。「みやこラボ」ではそのような人達も積極的に支援していきたい。

復興支援の緊急的な課題が徐々に減少していき、資金の調達も難しくなる中で、このまま息の長い支援につなげていくのか、ＮＰＯは当初の目的を果たせば延命を図るべきではないのか、葛藤に直面してきた。どうするべきか手探りの中で、現在は株式会社と共同でやっている。単純に企業から資金を得るだけではなく、志を同じくする者同士が一緒にやっていくというやり方だ。当面の課題は地域支援の担い手を作ること。震災４年目になり、地元の復興のために立ち上がった人々が次の目標を見失っている。それぞれが孤立していては前に進めない。まず復興の思いを持った人々が話し合う場を設けなくてはならない。同時に今後も活動を続けていくＮＰＯを支援する「中間支援」のＮＰＯを立ち上げたい。そのために「宮古ＮＰＯサポートルーム」準備事業を行っている。「中間支援」とは、ＮＰＯを支援する活動のことだが、子育てや環境問題のように理解しやすいものではないので、お金がつきにくい。しかし、この震災を機に立ち上がったＮＰＯを育てていきたいという気持ちは大きい。そのほかには、町を盛り上げるために「みやこほっこり映画祭」などのイベントを企画している。宮古は三陸で唯一映画館のある町なので、世界中から心温まる映画を集めて上映したり、上映作品の監督のトークショーを行ったり、また参加者同士のおしゃべりの場を設けるなど、参加型のプログラムも作っている。

町の活性化のためには、イベント的なもの・趣味的なものだけではなく、たとえば福祉と復興の両方をリンクさせていくような、幅広い市民活動も必要だと考える。市民文化会館を活用していくことも重要だが、それには企画力のあるコーディネーター的な人が必要だ。現在、市は盛岡のＮＰＯに市民会館の企画部門を委託する方向で動いているようだが、宮古のＮＰＯには声がかかっていない。これからは、長期的視点で復興を支えるために、地元の力を育てていく活動を行っていくつもりだ。

（２０１５年11月４日　みやこラボにて取材）

２　カリタスの取り組み

⑴　カリタスジャパン

国際カリタスはバチカンに本部を置くカトリックの社会福祉機構で１９５１年に創設された。現在では国際赤十字とほぼ同じくらいの規模をもつ世界最大級のＮＧＯであり、２０１５年現在、１６５か国の１８４団体が各国カリタスとして活動している。災害の被災者や難民支援など緊急的なもののほかに、各国の事情に即して、貧困や紛争解決、ジェンダーなどの問題解決に取り組んでいる。

カリタスジャパンは国際カリタスに先立って、戦後すぐの１９４６年、海外からカトリック教会に宛てた支援物資受け入れのために構想され、１９４８年に設立された。現在は国際カリタスの一員として

活動している。日本ではカトリック中央協議会に属する宗教法人であり、国内での福祉活動、災害支援をはじめとして外国の貧困、飢餓、災害などへの支援活動も行っている。国際カリタスは、震災発生の3月11日から9月までの6か月間にジャパンカリタスを通じて1億3千500万円の支援金を送り、2015年現在でも4月から9月までの6か月間に2億1千500万円の支援を行っている（『カリタスジャパン東日本大震災活動報告書』カトリック中央協議会・2013年3月11日）。カリタスジャパンは、この国際カリタス経由の資金と、ジャパンカリタスに直接送られる義援金で支援活動を行っている。

国際カリタスとは別に、スイスやアメリカなど大きな資金力をもつカリタスが、津波で流された釜石の鵜住居保育園の再建や、大槌の学校建設などを支援した。外国のカリタスのピンポイントの支援は、釜石や大槌に開設されたカリタスベースがつなぎの役を果たした。両方とも市や社協の信頼を得て、積極的に協働し提言を行える立場にあった。宮古の場合は、なるべく内部で行なおうという姿勢があり、外部の大きな支援団体を積極的に受け入れてこなかった。

カリタスジャパンは阪神大震災のときに長期の支援を行っており、大きな災害時の支援ノウハウを持っている。地震発生翌日には募金の受付を開始し、3月16日に被災地全体の中心となる仙台教区サポートセンターを設立、3月21日に塩釜ベースを設立しボランティア第一陣を派遣、3月24日には石巻、4月2日には釜石と次々にボランティアベースを設立していった（『東日本大震災支援活動 カトリック教会の歩み よりそいながら明日へ』仙台教区サポートセンター 2014年3月）。修道女も活動に参加することになり、4月9日から被災地に修道女を交代で派遣するシスターズリレーもはじまった（『福音宣教』オリエンス宗教研究所 2012・1）。

宮古は県外のボランティアの受け入れが遅れたため、4月22日になってやっとベースの設立にこぎつけた。カリタスジャパンの支援内容は大きく5つに分けられる。生活必需品などの物資支援、環境整備支援、傾聴などの心理的支援、農業や漁業再開のための経済的支援、そして被災児童への学費援助や家庭や放課後の学習補助などの教育支援である。宮古では、初期には物資支援と泥出しやがれき撤去などの環境支援が主であったが、仮設住宅ができてからは、社協の依頼により傾聴活動が中心になった。カリタスジャパンではそのほかに、地域住民主体の復興プロジェクトを立ち上げ、経済的な支援も行っている。塩釜市桂島では牡蠣の幼生を付着させるためのホタテ貝の人工殻を、韓国カリタスを通して取り寄せて寄贈し、気仙沼では商店街の復興支援としてミニコンサートホールや中高生の自習室づくりと学習支援を行い、南三陸町ではわかめ養殖再開に必要な資材を提供し、デイサービスセンターの再建を行った。カトリック教会のネットワークを駆使して、全国から人的、物的支援を得られるうえ、海外とのつながりも生かして、息の長い支援を行えるのがカリタスジャパンの特徴でもある。

(2) 宮古における札幌カリタスの活動

カトリック教会は全国を16の教区に分けており、宮古は仙台教区に所属しているが、北海道全域をカバーする札幌教区の菊地司教が宮古出身だという縁があって、宮古ベースは札幌教区が担当することになった。そのためボランティアも夜行の船と電車を乗り継いで、主に北海道から駆け付けている。札幌教区はサポートセンターを設けて寄付集めや人員の手配などの後方支援を行っている。「札幌カリタス」の名前は、東日本大震災の支援のためにつけられた、北海道のカトリック信者によるボランティア団体

写真1　カリタス札幌の世話人とボランティア
宮古わくわくまつり
2014/04/07　撮影：久保田滋子

の名称で、カリタスジャパンと目的を同じくするが、その下部組織というわけではない。岩手県には宮古のほかに、大船渡、釜石、大槌にカリタスベースがあり、どこも札幌カリタスのように独自の募金活動でまかなっている。宮古以外の3か所はそれぞれ責任者が常駐する形をとっている。

宮古だけは世話人が北海道から通っている。ボランティアベースを立ち上げてから2年間は1人が担当したが、2013年4月からは5人の世話人が2週間交代で北海道から宮古にやってくる形式をとった。最初はカトリック宮古教会を借りて世話人とボランティアが寝泊まりしていたが、教会聖堂も支援物資で手狭になり、また教会活動にも支障が出るので、社協から松山仮設に部屋を借りて2011年12月から世話人と男性ボランティアが住むことになった。2012年5月には女性ボランティア用の部屋も確保できた。松山仮設にはほかにも長期滞在するボランティアが住んでいたが、2013年になって社協から出るように言われ、また世話人も5人が交代で来るようになったので、佐原に2階建ての一軒家を購入した。世話人は主に定年退職後の男性で、ボランティアは70歳前後の女性が多く、長期の休みには札幌市内のカトリック系の藤女子大学や看護学科のある天使大学の女子大生も参加する。

写真2　移動カフェでボランティアが作成したキーホルダーを配る（さくら公園仮設住宅集会所）
2014/09/08　撮影：久保田滋子

2011年夏までの主な仕事内容は他のボランティアと同じように、側溝の泥出し、がれきの片づけ、個人住宅清掃などの肉体労働だった。7月になって仮設住宅を巡回する「移動カフェ」を開始。備品がなかったので、イス・テーブル・やかん・什器などをもって訪問した。その後、社協もサロン活動という名のお茶会を始め、集会所を巡回して傾聴活動を行った。部屋に閉じこもり孤独に陥りがちな人々が気軽に集える場所を提供し、被災者の話に耳を傾ける。サロンが始まった当初は、ボランティア活動が肉体労働だと思って来たら傾聴という慣れないことをしなければならず戸惑った人もいたので、後に出発前の研修を行うようになった。肉体労働が主だったころは70歳までという年齢制限があったが、傾聴活動に入ってからは制限がなくなり、80歳を超える人も参加するようになった。社協は、住民の自立を妨げるという理由で2012年10月にサロン活動を中止したが、住民の強い要望があって、それ以降はカリタス札幌独自の移動カフェを続けた。車につけている赤いカリタスのマークが「米」の字に似ているので、お米屋さんと勘違いされたり、コーヒー機器メーカーのボランティアだと思われたりしたが、2011年の夏から途切れることなく仮設住宅を巡回したことで、「カリタスさん」として親しまれ、高齢のボランティアも仮設住宅のお年寄りの良い話し相手になった。

カトリック教会主催の、物資を無料配布する「分かち合いマーケット」も手伝った。4月下旬に第1回、6月上旬に第2回を開催し、洋服、下着、生活用品、寝具、手入れをした中古の家電製品を配った。大好評だったが、無料配布は被災者の自立を妨げることもあり、また地元経済に影響を及ぼすということも考慮し、2回目からは家電製品など一部を100円から1千円くらいの廉価で販売するようになった。食料品はなるべく宮古の商店で買って出品した。お盆を控えて喪服フェアも行い、礼装のスーツやワンピースからワイシャツ、ブラウス、靴下、ストッキング、革靴、フォーマルバックまで、すべてそろえられるようにした。喪服は200着ほど集まり、あっという間に完売した。9月には手入れをして磨き上げた中古自転車37台を札幌から運んでマーケットに並べ、12月に行われた宮古市の物資配布会には、札幌教区サポートセンターが毛布500枚134万円相当を送って支援した。2011年は5回のマーケットを開催したほか、そこまで来られない高齢者などのために、仮設でのカフェのおりにミニマーケットを開き、衣料や日用

品の配布を行った。２０１３年４月には第８回目のマーケットが開かれたが、この頃になると物資も行き届き、主催者によると、本来の目的よりもむしろ「いつまでも忘れない」「寄り添っていく」というカリタスの心を示すものになってきた。

仮設住宅の住人が手仕事で収入を得られるような支援も行った。２０１１年の９月、高浜仮設を訪れたボランティアの女性が、入居者の方から押し花の手作り葉書をもらったことをきっかけに、押し花絵葉書の作成を依頼し、10月中旬から札幌教区サポートセンターが１枚２００円で買い上げ、教会を通して販売をはじめた。２０１１年度は１千９５０枚の売り上げ実績があった。札幌教区が支援しているフィリピンの児童養護施設に持参するアクリルたわしも製作してもらい、サポートセンターが買い上げた。２０１２年３月には、長く続く本格的な手仕事を導入できないかという視点から、さおり織の体験会を開き、住民の賛同を得て、卓上織機と糸を取り寄せ、浄土ヶ浜仮設に札幌から指導者を派遣した。この企画は「みやこ若者サポートセンター」の協力を得られることになった。最初は練習のために織ることを楽しんでもらい、技術が向上したら販売ルートに乗せることにした。２０１５年現在では、宮古のゆるキャラのみやこちゃんとサーモン君ストラップなどを道の駅や教会バザーなどで販売している。そのほかには、人形作り、裂き布での草履づくりなど、お年寄りも楽しめる手作業の機会を設け、手芸が盛んな仮設にはミシンとアイロンを寄贈した。

震災の年の夏休みが過ぎると、どこでもボランティアの数は急減した。宮古でも２０１３年３月で他県、市町村からの団体はほとんど撤退したが、カリタスは数少ない団体の一つとして活動を継続した。社協からも表彰を受け、「カリタスさんに馴染んでいる人も多いので、このまま続けてほしい」と依頼された。２０１５年３月末現在で、まだ３年ほど活動できる資金を残しており、仮設が撤去されたあとも、災害復興公営住宅でのコミュニティづくりなどを継続したい意思はあるが、その件については社協から声がかかっていない。

⑶　ボランティアに参加して

伊藤純子さん　カトリック宮古教会教会運営委員長　昭和23（１９４８）年生

津波後の教会について

震災当日、主任司祭は休暇でメキシコに一時帰国中だった。震災後１週間から10日くらいは電気も水道も通っていなかったが、宮町の教会周辺は比較的早く復旧したので、炊飯器を運びこんで炊き出しを行った。３月下旬になって、北海道から上杉神父、盛岡から佐藤神父、東京からダビデ神父が様子を見に来て、震災の３週間後にはじめてミサをあげることができた。ダビデ神父滞在中に大阪と神戸からボランティアをしたいという大学生が訪ねて来た。泊まるところを決めてこなかったが、ダビデ神父が受け入れを決め、聖堂と神父の住まいである司祭館を開放し、女性は司祭館に、男性は聖堂に寝泊まりするようになった。北海道の上杉神父が宮古を管轄する仙台司教区に許可を得て、３月下旬に正式にボランティアセンターを開設する運びとなった。内陸部の遠野はさまざまなボランティア活動の拠点になっていたが、遠野カトリック教会も釜石など近隣の教会のボランティア拠点になっていた。岩手県の多くのカトリック教会を設立したスイスからのボランティアや、マザーテレサゆかりの修道女など、外国からの支援の申し出も多かったと聞く。そのような人たちが宮古へも視察に来て教会を訪れたが、応対が非常に大変だった。初期のころはボランティアの対応も、受け入れのノウハウがないため、かえって混乱した。震災１か月後から北海道のカリタスの支援が入ることになり、聖堂を全部カリタスの基地として提供した。

カトリック教徒は聖堂で祈ることをとても重視している。しかしこの大きな災害の中では、祈りよりまず行動しなければならないこともある。聖堂の中での祈りだけが祈りではなく、行動の中での祈りもある。聖堂をボランティアに明け渡したのも、緊急の助けを必要とする人を優先するためである。チリ地震津波のとき、宮古教会では神父を中心に翌日から支援活動をはじめた。しかし今回は主任司祭（神父）が不

在で、すぐにリーダーシップをとる人がいなかった。でも何か活動を始めないといけない。教会に神父の車があったのでそれを使って救援活動を行った。動ける人が動ける間に生活できない人をたすけなければいけない。明らかに被災した人には支援の手が差し伸べられる。しかし高台の人にはなかなか助けが回ってこない。市に頼れないで親戚頼みの人も多い。寒い中湯たんぽひとつでしのいでいる人もいる。このような人に手をさしのべていくことが大切だと感じた。

（２０１３年９月15日　カトリック宮古教会司祭館にて取材）

シスター五十嵐悦さん　藤沢みこころの姉妹会修道女　岩手県のカリタスベースを巡回

シスター五十嵐は震災後すぐに活動を開始し、塩釜から南三陸、米川を経て、２０１１年11月から約２か月間宮古に滞在した。

宮古での活動で一番印象的だったのは、行政ベースの支援活動の遅れだった。２０１１年11月、南三陸ではすでに物資の支援は終了し、生活を維持し自立を促す支援に入っていたが、宮古ではまだ衣類に事欠く人が多く冬物衣料を配って歩いた。宮古市役所が衣類を放出していなかった。仮設住宅へ衣料を配ると「身内びいき」などの問題が起きるのでなかなかできないという話もきいたが、実際にどのような事情で遅れたのかはわからない。12月に入ってからやっと冬物衣類の放出をしたが長蛇の列で、お年寄りなど寒空の中大変だったようだ。体育館で行った衣類、米、生活物資の配布の手伝いもしたが、他の市に比べるとあまり要領がよいとは言えなかった。車で来て、１人で段ボール２箱くらい持って行く人もいたので市役所の人にその旨を告げたら、フリーマーケットで売る人もいると聞いているが、いちいちそれを区別していられないとのことで、寄付してくれた人のことを思うと残念な気がした。しかし現金収入が少ないので、それも仕方がないのかという思いもあった。宮古教会では、早くから幼稚園のプールを衣類置き場にして被災者に配った。信者総出で衣類の仕分けをしたが大変な作業だった。

（２０１３年６月23日　ＮＰＯ法人カリタス釜石集会室にて取材）

戸澤恭子さん　盛岡四ツ家教会、教会委員長　昭和14（１９３９）年生

２０１１年３月26日から宮古支援に携わる。現在では毎月第２と第４火曜日に釜石、第３月曜に宮古へ出向きボランティア活動をしている。４月に四ツ家教会のボランティアの１人がはじめて鍬ヶ崎小学校を訪れたとき、昼間なのにほとんどの人がぐったりと横になっていた。それもビニールの敷物の上に枕なしで寝ていたことに驚き、４月から９月まで宮古を中心に寝具を届ける活動を続けた。枕は秋田の大館からそば殻を仕入れ、信者有志が総計２千個を作り、田野畑、宮古、釜石、陸前高田、大船渡にまで届けた。枕を作っているうちに炊き出しや物資の配布も始めた。80代の信者も駆け付けてきて、この年になっても人の役に立てたと喜んだ。宮古では教会主催の「わかちあいマーケット」が開催され、毎回３００人以上も集まった。

現在は仮設住宅へ昼食を届けている。この活動は、ともに食卓を囲むことの大切さを説いたキリストの教えの実践でもある。いつも５～８人が車２台に分乗して出かける。先日はちらし寿司を作った。かんぴょう、シイタケ、卵などの材料を持って行って集会所の台所で作る。八幡平から漬物を持ってきてくれる人、財布などの小物を作って持ってくる人もいる。盛岡在住の信者でそば打ちができる人、ボーイスカウトのリーダーをやっていて包丁を砥げる人などが同行し、現地でそれぞれの特技を生かしている。盛岡の３つのカトリック教会の信徒に協力を依頼しているので、さまざまな技術を持った人が参加してくれる。料理もバリエーションがあり喜ばれている。

ともに食卓を囲む主な目的は傾聴で、一緒に食事をするのは心の垣根を取り払うためだ。宮古のお雑煮は盛岡とは違う。浜では餅を甘いくるみにつけて食べる。そのような話をしながら交流を深め、実際にお雑煮を一緒に食べて親しくなる。お互いに知りあうようになると、苦しい心の内を話してくれる。

盛岡では独居老人の孤独死が問題になっているが、被災地でも同居の若い人が津波で亡くなり、残されたお年寄りは孤独感を募らせている。老後の面倒を見てくれる人がいなくなり「あのとき一緒に死んでしまえばよかった」という思いから自殺願望を話す人もいた。昨日も被災地で6年前に建てたばかりの家を流された65歳の人の話を聞いた。

キリスト教の信仰のある人でも、これが神の望みとは思えない。人間はそんなに簡単にあきらめがつくものではない。遺体のあがらない家族がいる人は、毎月11日に海に花を投げると話していた。日本人は遺骨が戻らないとあきらめきれない。すべて流されたあと、最初にできた店が食べ物屋ではなく仏具店だった町があると聞いたときはショックを受けた。生き残った人に何ができるのか。この傾聴のボランティアを通して深く考えるようになった。

信者は信仰を深めるために動くことが大事だ。しかしそれが人への押し付けになってはいけない。カトリックは宗教の話が何もないと被災者から聞いた。カリタスは特に宗教色を出さないように気を配っている。阪神大震災のときに、カトリックという名前を出したことで「布教お断り」と言われた苦い経験がある。カトリックはカリタスという名前で活動しているが、一般の人はカリタスが何であるか知らないし、あえて知らせることはしない。釜石ではカリタスの活動をNPO法人にしてカトリックから距離を置いた。修道院からボランティアに参加しているシスターもいるが、違和感なく溶け込んでいた。彼女たちはどんな環境でも音を上げず、狭い台所で黙々と働き、地元の人から農業の指導を受けて畑を作った。そのような姿は好感を持たれたと思う。

神父は外国人も多いので考え方もさまざまだ。震災の時、宮古教会のメキシコ人神父は休暇中で被災地にいなかったが、すぐに戻って来ることはなかった。あの津波の被害を見ても、人には誰も悩み苦しみがあると言ってあまり被災者のことを考えていないように見えたし、被災者がひもじい思いをしていても、肉を食べたいと言って我慢しない。しかし、緻密ではないが太っ腹で、帰ってきてからは、自分の部屋をすぐにボランティアに明け渡した。スイス人の神父は被災者一人一人に心を寄せて励まして歩いた。どこの世界もそうだが、多様な人間がいてはじめてさまざまな活動ができる。ボランティア活動は臨機応変に動かなければならないので、いろいろな人がいたほうがいい。

今回の支援は阪神のときの経験が生きた。何が必要か、何をどのように調達すべきか、資金はどうするか、カトリックのネットワークが即座に動いた。ガソリン不足が深刻なころも、教会の車はガソリンに事欠かなかった。全国の修道女が交代で支援にあたったのも大きかった。教会での献金、教会バザー、神父の講演料などがすぐに集まり資金は潤沢にあった。

（2013年6月26日　盛岡四ツ家教会にて取材）

佐久間　力さん　神学生　41歳（2014年3月10日現在）

神学生になる前はJICE（一般社団法人日本国際協力センター）にいて、農業土木部門を担当していた。JICEは、JICA（国際協力機構）が実施している海外援助の現場と日本の援助機関を結ぶ役目をもち、JICAが海外で効率よく支援活動を行えるよう、情報収集や派遣される人の国内研修なども行っている。震災の前の年、司祭になる道を選び、震災当時神学生になるために待機中だった。宮古はカトリック札幌教区が担当することになったため、当時札幌在住だった佐久間さんは、長期ボランティアとして被災地に派遣された。2011年3月22日に仙台に入り、3月23日から石巻に、その後、塩釜、釜石でボランティアを行ったあと、5月9日からボランティアベースの運営のため宮古に常駐するようになった。

前職での経験もあり、被災地での支援には支援者と被支援者の間をつなぐパイプ役が必要だということを実感した。その点宮古ではあまり対策がなく、臨機応変な対応もなかった。カトリック教会では早くから札幌教区が宮古支援に名乗りをあげていたが、宮古社協ははじめのうち外部のボランティアを受け入れていなかった。4月末ごろから徐々に受け入れが進んだが、当初外部の民間団体は入りにくかった。石巻では3月中に石巻専修大学に、社協、商工会、NPOなどの民間

団体が集まって、誰が何をどのように担当するのか、何が必要なのかを話し合う場が設けられ、お互いに補い合いながら、初期援助をスムーズに進める方法を模索していた。どこでどれだけの支援を必要としているのか、市や社協で情報をつかむとＮＰＯがすぐに動いた。自己完結型のＮＰＯは食料を自給しながら、迅速に行動を起こせる。これを使わない手はない。被災者支援では、まず被災者のニーズをすくい上げることが重要なのは当然だが、そのような仕事は社協ひとりが抱え込まないで、自己完結型で実績のあるＮＰＯなども取り込んで進めるほうが効率的だ。宮古は「外部」を警戒して、何でも内部で済ませうとするムラ意識が強いと感じた。ボランティアにもさまざまな特技を持つ人たちがいるので、そのような人たちをいかに有効に使えるか、この「振り分け」もポイントだと痛感した。

子供のために使ってほしいなど「意向」のついた支援金も多く寄せられる。目的をつけると支援金は集まりやすいが使い方が難しい。30万円でパンツを買ってくださいと言われたら、下着会社にそのお金を振り込んで送ってもらうわけだが、振込手数料は市が持たないといけない。石巻では被災者にお湯を提供してくれという支援金が来たが、この場合はガス代やコーヒー代も含まれると考えていい。意向通りに使わないといけない決まりはないが、モラルの問題としてほかのものに使うことはできない。これをどのように実現させるのか、いかに透明性を確保して使うか、被災者のニーズといかにマッチさせるかという「つなぎ」は、その専門の担当者を置かないとなかなかスムーズに行えない。宮古にはこれがなかった。社協の職員は災害や外部支援受け入れにおいては素人の集団だ。また、石巻のようなラウンドテーブルもなかった。支援金が何に使われているのか知りたい人もたくさんいる。このような情報提供も必要だ。

支援金の扱いは「つなぎ」と「透明性」がポイントで、「送りたい人」と被災者に「送り届ける人」をスムーズにつなぎ、情報開示していくことが求められる。非常時には、市役所にこのようなことができるロジスティックの専門家を置くといいと思う。海外支援専門のＮＧＯなどに呼びかければ、必ずそのような人はいるはずだ。常勤ではなくとも、非常時にすぐ声をかけられるようにしておくことが重要だ。釜石や大槌では、カリタスと上手に連携して、資金力のある海外カリタスや銀行の支援を得ることができた。

支援物資の無料配布にしても、いわゆる業者のような人が段ボール箱で物資を持って行くことに気づいていた。しかし、そのような情報を伝えたが、市が行った衣類の配布では、段ボール箱に何箱も詰めて持ち帰る人がいた。必要な人に物資が回らないなど、民間団体の情報が生かされなかった。カリタスの無料配布でも、最初はほしいものを欲しいだけもっていくという方式をとった。しかし、商店の人や被災者ではない人もやってきて、大量に持って行くケースが目立ったので、個数制限をしたり、45リットルの袋を渡し、入るだけ持って行くなどの方策をたてた。

衣料品の仕分けが最も困難だった。ボランティアのエネルギーの多くがそれに費やされてしまう。洗濯していないものなどが多く、古着と新品に分けて送ってくれるようにするなど対策が必要だ。衣類の中でも最も不足したのは下着で、特に２Ｌ、３Ｌは手に入らない。ワコールが協力を申し出たが、特定のところで社長が贈呈式をやるなど派手な演出があって、社長が来られないところには回ってこなかった。市では災害時に備え、食料品などと並んで下着をストックするといいと思う。

宮古で活動している札幌カリタスは主に仮設の集会所にカフェを開き傾聴活動を行っている。最初は１００円ショップでマグカップを買ったが味気ないので、札幌の教会の人に呼び掛けてティーカップを募ったら、ロイヤルドルトンなどイギリスの高級品が集まり、カフェの雰囲気が変わった。ただコーヒーを淹れるだけではなく、おもてなしをしたい気持ちをかたちにできた。カリタスジャパンでは全部の仮設住宅談話室に、津波で店を流された電気屋を通してテレビを購入し寄贈した。また、高浜の小学校にサッカーゴールを寄贈した。新盆支援をしたらどうかという話も出た。お盆は非常に大切な行事で、特に津波

で亡くなった方の新盆供養が十分にできないのは辛いことだと思う。被災者の心を支えるために、さまざまな支援を考えている。長期支援になることを想定して、札幌カリタスでは佐原に一軒家を購入しボランティアの基地も作った。ボランティア活動も苦労は多いが、司祭を目指す身としては、聖書の言葉にあるように「必要なものは与えられる」と実感している。

（２０１４年３月10日　二中仮設の集会所にて取材）

石崎瓔子さん　シスター　70歳（２０１４年３月10日現在）

フランシスコ修道会のシスター。札幌の藤女子大学の学生を連れてたびたび宮古を訪れている。今回で６回目の訪問になる。宮古の他にもボランティア訪問をしている。

最初に宮古に来たのは２０１１年６月で、そのときは教会に寝泊まりし、教会のハウスキーパーを行っていた。震災の直後から来たかったが、宮古市は４月下旬くらいまで外部のボランティアを受け入れなかった。２回目は同年12月で、仮設を回り被災者の話し相手になった。最初は修道服姿なので敬遠されることも多く、宗教の勧誘と間違われて通報されることもあった。しかし、だんだんに打ち解けて、シスターと話したいという人が増えていった。仮設は狭い社会であり、内輪では話せないことが多い。被災体験も人によって程度の差があり話しづらく、人間関係に行き詰っている人も多かった。外部の話し相手は重要で、それも「普通の人」よりさらに非日常的な修道女は、本音を話すには最適な相手だったのかもしれない。カリタスでは宗教色は一切出さないようにと言われていた。そのため、修道女も最初は平服で活動したが、修道服のほうが傾聴に向いていると感じ、途中から平服はやめた。

女性にくらべ男性は問題を抱えている人が多かった。行き詰っているという相談が多かったが解決策はない。ただ傾聴するしかなかった。精神的に病んでいるのではないかと思う人も何人かいた。体の医療はあっても精神医療は手薄だと感じた。ボランティアで傾聴できる人も少ない。学生は高齢者や中高年男性の話し相手に適しているが、年代が高くなると、相手の話をひたすら聞くのは難しい場合もある。２０１２年からは札幌の藤女子大学の学生ボランティアを引率してくるようになったが、彼女たちは話を聞くのが上手だった。仮設の住人にとっても若い女子大生の明るい華やか雰囲気は喜ばれたと思う。

（２０１４年３月10日　崎山仮設集会所にて取材）

佐藤彰洋さん　神学生　29歳（２０１４年３月11日現在）

カトリック仙台教区から震災直後に各地のボランティアに派遣された。塩釜、米川、南三陸町、宮古で活動した。宮古へは２０１１年の７月にはじめてやってきた。他の地区では漁業支援として漁船の洗浄などをしたが、宮古では主にカフェを行った。「カフェをやりますから集まってください」と声をかけても最初抵抗があった。「放っておいてくれ」という空気があった。それでも女性は集まってきたが、男性はほとんど来なかった。男性は人間関係が難しいと感じた。男性のボランティアが傾聴のために被災者の中に入っていくのは時間がかかると感じた。

社協は最初、カリタスというキリスト教系のボランティアに慎重だったが、次第に活動の幅を広げることに寛容になった。クリスマスに関して、震災の年は、社協の催しの一部に参加させてもらってクリスマスの歌を歌っただけだった。２０１２年には外国人神父がサンタクロースになって、子供のいる家庭を回った。２０１３年は社協の許可を得て、宮古教会の人達が仮設を回り、クッキー、キャンディ、カードを配った。札幌の教会の人達が１千４００セット作成してくれた。カリタスの活動が認知されてきたとはいえ、今でも宗教色は全く出していない。

ボランティアの終了時はいつなのか。宮古教会では「わかちあいマーケット」を行っているが、様々な問題に直面している。開催すれば多くの人が来るが、被災者が今でも本当にこのマーケットを必要としているのか。一般の人々の関心の低下も感じる。ボランティアも激減している。震災直後の緊急援助的な支援と長期支援とでは問題が異なる。

ボランティアも量ではなく質が問題になってくる。仙台教区では、あと3年は支援を続けると言っているが、どうなるのか。難しい問題だ。

（2014年3月11日　カトリック宮古教会司祭館にて取材）

今野　忍さん　カリタス札幌世話人　昭和24（1949）年生

今野さんは定年になった2013年5月からボランティアに参加し、宮古ベースの世話人になった。

カリタスの宮古ベースは2011年4月22日に立ち上げられた。これはカリタスが入った被災地では最も遅い方だった。宮古市が外部ボランティアをなかなか受け入なかったためだが、札幌教区の信徒は宮古に入る準備を整えていた。宮古社協が外部のボランティアを受け入れる前に宮古へ着いたので、最初は山田町でがれき撤去などをしていた。

2013年4月から、カリタス札幌の世話人は5人になった。全員定年後の男性である。この5人が約2週間交代で宮古に来て、人はかわっても途切れなく「カリタス札幌」の活動ができるようになっている。現在は1万円の交通費補助が出て、あとは自己負担だ。ほとんどの人は札幌を夜9時に出るバスに乗って、苫小牧からフェリーで八戸に来て、宮古へ午後1時に着くルートで来る。70代の人も多いので大変だと思う。札幌のサポートセンターには宮古の専属が10人いて、人員や資金、仕事内容の調整を行っている。活動は、仮設を回る「移動カフェ」が中心だが、ボランティアは仮設の住人と直接コンタクトを取らないので、実施場所はすべて社協まかせだ。月末に行き先を言われ、札幌のサポートセンターで人員などの予定を組む。仮設住宅には人間関係が複雑なところが多く、集会室も一部の人たちだけが出入りしているところもある。出てこられない人は部屋に引きこもっている。しかし、個別訪問が禁じられていたので、集会室に足を運ばない人まではフォローできなかった。現在は個別訪問もできるが、高齢男性や精神的に不安定な人への支援は福祉の範疇で、ボランティアでは力が及ばない。また、仮設の住民と直接コミュニケーションをとっているのは社協だが、要望を出してもなかなか市に伝わらないようだ。仮設の住民の社協への不満も感じるし、実際に福祉的な面の対策は遅れているように思う。仮設の自治会長も、住民のクレームの処理が大変なので、新たななり手がないところが多いようだ。しかし、家を建てて出て行ったあとも自治会長を続けている人もいる。

移動カフェを行うようになって、多くの人と親しくなった。「だんだんボランティアの人が来なくなった」「忘れないでくださいね」「見捨てないでくださいね」という言葉を聞くと、続けることに意義があると感じる。

（2014年4月28日取材）

写真3　移動カフェ　清寿荘仮設住宅集会所
左側がボランティア
2014/04/28　撮影：久保田滋子

塩谷ケリーさん

足湯（専用の容器にお湯を入れ、足を温めながら手のひらを揉み、対面して傾聴を行う）をしながら、被災地各地を回っている。2011年4月に日本財団が福島で足湯を行い、希望者に講習を行って、個人が各地で行うようになった。塩谷さんは釜石のカリタスで足湯を知り、日本財団の講習を受けた。し

写真4　実田仮設住宅集会所で行われたカリタス札幌の移動カフェ
2014/04/29　撮影：久保田滋子

かし、希望者が殺到していて、1年くらい待たなくてはならなかった。宮古へは2012年8月にはじめて来た。以降、カリタスと活動をともにして、仮設を巡っている。足湯に対する反応が各地で異なる。南相馬、陸前高田などは人々がたくさん来るが、宮古では呼びかけてもあまり出てきてくれない。仮設住宅の集会室に来る人が固定されていて、いつも同じメンバーばかりだからと思う。集会室に来づらい人が多いのではないかと感じる。仮設によってはオープンなところもあるが、暗いと感じるところもある。

（2014年4月29日　実田仮設住宅にて取材）

毎原結衣さん　平成8（1996）年生　カリタスボランティア　天使大学1年

天使大学では「震災掲示板」があり、そこにカリタスのポスターが貼ってあった。大学生になったら一度は被災地でボランティアをやってみたいと思い、カトリック教会に電話をしてカリタスの担当者に意向を伝えた。行くことが決まり、宮古までの経路と到着時間を伝え、宮古駅でカリタスの世話人の出迎えを受けた。学校で被災地への募金を行っているが、宮古へ行くことが決まると、その募金を集める係だったこともあり、集まったお金を直接届けたらどうかということになった。

写真5　和見仮設住宅集会所で行われたカリタス札幌の移動カフェ
2015/03/09　撮影：久保田滋子

札幌カリタスが宮古支援をしているので、北海道のカトリック系の大学の人は宮古へ行く場合が多いが、藤女子大は交通費と食費を全額前払いで出してくれるらしく、多くの学生が参加していると聞いた。天使大学は2万円だけ出してくれる。一番安い経路で来ても2万円をオーバーするし、食費は自己負担のうえ、帰って報告書を出してからでないと支払ってもらえないので経済的には少々厳しい。今年は天使大学から6人参加した。昨年は14～15人参加したようなので、だんだん減ってきているのかもしれない。

カリタスへは朝食と昼食に150円ずつ、夕食に300円の合計600円を払う。しかし、実際にはこれより高い食事をしていると思う。佐原にカリタスのボランティアが宿泊するための家がありここで自炊する。活動は9時半から3時までで、昼食はおにぎりだけ。毎日違う仮設に行き、お茶とお菓子を出して被災者の話し相手をする。滞在期間中に「ふれあい祭り」があったので、9月6日はその準備、7日はジンギスカンの屋台を出した。

来る前、被災者はもっと落ち込んで暗いのかと思っていたが、みな明るいので驚いた。長くいるボランティアの人から、自分が行った西ヶ丘の仮設はとても明るい雰囲気だと聞いた。西ヶ丘ではあと1年は全員が仮設に残るということで、「みんなでがんばろう」という雰囲気があると仮設の人たちも言っていた。お茶のときの話題は、方言のこととか、来週の八幡様のお祭りのこと、宮古の神楽のことなど、自分たち学生に宮古のことをいろいろ教えてあげようというような内容だった。

大学で今回のボランティア体験を発表するのでもっと多くの学生が来るように勧めたい。自分は看護師になるが、できれば被災地などで精神医療の手助けをしたいと思うようになった。

（2014年9月9日　山田線盛岡行車中にて取材）

芳沢昌裕さん、武田五郎さん　カリタス札幌世話人

さおり織

集会所に集まってただお茶を飲むだけではなく、前向きに生きていくために、何か目標を持ってもらおうと、さおり織の機械と糸を寄付して指導者を送った。浄土ヶ浜、西ヶ丘、二中の仮設で行っている。

写真６　移動カフェ　愛宕小学校仮設
窓際の２人がボランティア
2015/05/02　撮影：久保田滋子

最初はイカのストラップを作っていたが、マフラーや布地を織れるようになってきた。さおり織は本部があって機械の特許を持っている。ここで、さおり織のイメージを損なわない程度の技術があると認められれば、「さおり織」として販売することができる。昨年10月、宮古市のゆるきゃらの「みやこちゃん」「サーモン君」を作り見てもらったところ、これならいいだろうということで販売することになった。

布と違って糸は高い。自分たちで資本投下していく方針で、売り上げから糸代を捻出しているが、商品がさばけないと次の糸が買えず行き詰る。そのようなときには、一時的な対応として、札幌カリタスが買ったこともある。カリタスではさおり織の製作に関して一切口をはさまない。あくまで陰で支援するだけで、製品の買い取りも「買い取って助ける」のではなく「作っていただいている」という立場で行っている。

荷竹仮設や清寿荘仮設ではメーカーから生地が持ち込まれてティッシュボックスのカバーやおはじきなどの布製品を作っている。そのような作品を秋冬の教会バザーで売ることもある。

世話人とボランティア

現在は世話人６人体制で65歳から73歳までの男性が行っている。ベース担当は和田真一さん。女性も募集しているが、大きな車に人を乗せ、細い路地を運転するので難しい。２０１５年３月まで、世話人は２週間交代だったが、４月からは１週間から10日交代にした。仮設で行う移動カフェは世話人のほかに１人か２人で行っている。人数が多きときはやりくりして世話人プラス３～４人で動く。札幌での後方支援は10人くらいが交代で行っている。ボランティアは大学の掲示板と教会のホームページで募集する。はじめての人にはオリエンテーションを行い、仮設の実情や持ち物、男性の場合飲酒を自粛するなど一般的注意事項などを話す。交通費はフェリーを使う最安ルートでカリタスから支給される。ボランティアに行きたいけれど行かれない人は献金や寄付で協力してくれる。

今のような移動カフェは２０１１年８月に仮設ができたときからはじまった。それまではガレキ撤去作業などをやっていたが、８月には大型ごみだけになり、仮設もできたので、社協から傾聴活動としてカフェを行ってほしいと依頼があった。最初は２チームで動いた。女性は若い人が多かった。芳沢さんはおせんべい屋さんが印象に残っている。家庭のゴミ出しを手伝っていたが、ご主人は口もきいてくれなかった。しかし、使い物にならなくなっていたせんべいを焼く機械を磨き、自転車の修理をしたら、「よく来てくれた」と笑顔になった。大変うれしかった。移動カフェでは、ただひたすら聞き役に回る。仮設住宅にはここを出たくても出られない人がいる。たぶん、10年たっても出られないかもしれない。最後の１人までつきあう覚悟でいる。また、災害公営住宅に移った後も談話室で地元の人たちとの交流を支援したい。現在、釜石など他所のカリタスとはイベントなどを通して交流している。また、年に３回「宮古ボランティアニューズレター」（カトリック札幌教区サポートセンター）を発行している。仙台教区に２００部送って各所に配布してもらっている。

（２０１５年５月２日　カトリック宮古教会聖堂にて取材）

和田真一さん　カリタス札幌世話人　昭和22（１９４７）年生

２０１１年９月からベース担当になり宮古に常駐していた。最初は教会の聖堂に寝泊まりしていたが、のちに松山仮設に住むようになった。２０１４年になって、県からの応援職員や工事関係者に貸すので出てほしいと言われ、引っ越し先を探しはじめた。社協のサロンやカ

リタスの移動カフェで仮設住宅を回っていたので顔なじみが多く、「カリタスさんにはずっと続けてほしい」と言われていた。松山仮設を出なければならなくなったとき、ある仮設住宅の人たちが「カリタスを追い出すとは何事だ」と怒り、市役所に直談判をしてくれた。このとき、本当に受け入れられているのだなと感じた。

カフェは住民が集まるチャンスを作っている。集まる人は決まっているが、カフェがなければその人たちも滅多に集まらないかもしれない。年度が変わるころになると「終わってしまうのか」と聞かれることが多い。しかし、一度かかわった限りは最後の1人が仮設を出るまで続けるつもりだ。カフェは傾聴を行うが、同じ仮設の人が何人かいるとあまり話さない。人がいなくなると急に話しだす人が多い。ほかにも傾聴ボランティアをする人たちがいるようだが、カリタスには特別親しみを持ってくれているように思う。最初のころは辛かったことなどをずいぶん話した。家を失った人、家族が亡くなった人、人が流されて行くのを見た人など、1人が話しだすといっせいに話しだした。しかし最近はあまり話さなくなった。震災後2年たったころから震災の話はほとんど聞かなくなった。

現在、災害公営住宅への移転が進んでいる。公営住宅に移って新しいコミュニティづくりをするときまた支援をしていきたい。

（2015年8月8日　カトリック宮古教会にて取材）

佐竹保子さん　カリタス札幌ボランティア　昭和18（1943）年生

宮古は外部ボランティアの受け入れが遅かったので、震災直後の3月から4月にかけては多賀城にいた。多賀城にはインド人やアメリカ人、イギリス人など外国人のボランティアも入っていた。避難所にいる人がまんじゅう一つを分け合っているところを見て、その外国人ボランティアが感動して泣いていたのが印象的だった。2011年6月15日、カリタス札幌のボランティア第10陣としてはじめて宮古に来た。札幌の北一条教会に集まってお祈りをして神父の話を聞き、車に薬や米などを積み込みフェリーで本州に渡った。青森から宮古へ車で向かったとき、自衛隊のトラックがずいぶん走っていた。カリタスのボランティアは60代が多かった。宮古では水が入った蔵の掃除や側溝の泥かきをした。ハエの季節なので急がなくてはならなかった。土嚢をいっぱいにすると持てないので、半分だけ入れて運んだ。1時間作業をして30分の休憩を繰り返した。「男山」の工場の側溝の掃除もした。酒の匂いが充満していて気分が悪くなる人もいた。ここでは山から引いている水を水がめにためているのだが、それがとてもおいしくて、もらいに来ている人も多く見かけた。

2011年は6月、7月、9月、10月、11月に宮古へ来た。仮設住宅への入居が決まった人に「引っ越しを手伝います」と言ったら、「運ぶ荷物などない」と言われた。また喪服がなくて困るという相談を受け、札幌のサポートセンターに相談した。それが喪服フェアにつながった。2年たったときには、孫の成人式に振袖がないという話を聞いた。「振袖なんて贅沢だよね」と言っていたが、これもすぐに相談した。日用品はたくさん来るが、喪服や振袖、自転車は社協も気づかなかった。カリタス札幌の宿舎として松山仮設を貸してもらうようになったが、最初に行ったとき、みな同じ食器を使っていたので、めずらしい食器を持っていって配った。最初は喜ばれたが、そのうち断られるようになった。2年くらいたつと物が多くなってきて狭い仮設に置き場所がなくなる。日用品以外、だんだん物は必要なくなっていった。

カリタス札幌独自の支援として「わかちあいマーケット」があった。寄付されたものや支援金で買ったものなどを配り好評だった。最初は全部無料で食料や洋服、日用品、家電などを配っていたが、住民の方から「すべて無料はよくない」と言われた。それから、タオルケット300円、バスタオル100円と廉価で販売するようになった。北海道で集めた自転車は500円で売った。

冬季に北海道からボランティアに行くのはいろいろ大変なことがある。冬はボランティアが減るが、雪かきなど、ボランティアのためのボランティアがいないとなかなか出てこられない。宮古から帰ったら家に入る通路が雪で埋まっていたということもあった。それでも札幌

カリタスの支援が続く限り来たいと思っている。ただ、災害住宅に移転すると出番がなくなるかもしれない。

（2015年8月10日取材）